

語いと英語教育 (48)

「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」の活用法に関する研究
研究部員の授業力向上を目指した授業研究

2026年2月20日

東京都中学校英語教育研究会

研 究 部

《研究部ホームページ <https://sites.google.com/view/tokyo-chueiken-kenkyubu>》

目 次

I. あいさつ	02
II. 昨年度までの研究のあらまし	03
III. 今年度の研究	04
研究テーマ：「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」の活用法に関する研究 研究部員の授業力向上を目指した授業研究	
研究の動機	04
「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」活用法の紹介	04
▪ meaning-focused output	
▪ language-focused learning	
▪ fluency development	
研究部員の授業力向上を目指した授業研究の紹介	14
▪ 授業 1 Lesson 3 “Hot Sport Today” <i>Sunshine English Course 3</i> (開隆堂)	
▪ 授業 2 Lesson 1 Part 1 “Play me, I’m Yours” <i>Power On 1</i> (東京書籍)	
▪ 授業 3 Unit 4 “Our New Friend” <i>Here We Go! English Course 1</i> (光村図書)	
▪ 授業 4 Unit 4 “Tour in Singapore” <i>Here We Go! English Course 2</i> (光村図書)	
▪ 授業 5 Lesson 6 “Imagine to Act” <i>New Crown English Series 3</i> (三省堂)	
IV. 今後の課題	21
V. 参考文献	22
VI. 研究部のホームページについて	23
VII. あとがき	24
巻末資料	
1 研究部の歩み	25
2 今年度の活動記録	34

I あいさつ

「あらゆる人々の well-being を実現する授業をつくる」

平素より、東京都中学校英語教育研究会の活動へのご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げます。また、多くの皆様の御指導、御助言をいただき、本研究会研究部における令和7年度の研究成果が結実したことに改めて感謝申し上げます。今年度は、第75回全国英語教育研究大会（全英連和歌山大会）および第49回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会大会（関ブロ神奈川大会）、また本研究会においても全ての部でワークショップや発表会が開催され、英語教育の新たな可能性や方向性が検討されました。

さて、今年度の研究部の研究は二つのテーマで構成されました。

一つは、「自己表現サポート Vocabulary List」（研究部，2025）の活用法に関する研究です。昨年度発表の同リストの授業での活用例を部員5人が紹介しています。これは Vocabulary List を活用した言語活動の例です。指導手順とともに、授業者の振り返り、授業を参観した研究部員からの意見が記述されています。その後、授業者等の主体的・対話的で深い学びがなされ、授業改善につながったと考えられます。なお、活用例は応用言語学者 I.S.P. Nation の the four strands により分類されています。

二つは、「部員の授業力向上を目指した授業研究」です。これは研究部内で研究と同様に授業改善が重要であるという議論がなされたことによります。部員5人が授業録画を提供して、研究部全員で視聴しました。今年度は新出文法や教科書本文を教師が口頭導入する場面を中心に議論が行われました。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（令和3年1月）に示された「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」は教師自身の学びが主体的・対話的で深い学びであればこそ実現できます。また論点整理（令和7年9月）では、次期学習指導要領の改訂の方向性として①「主体的・対話的で深い学び」の実装 (Excellence)、②多様性の包摂 (Equity)、③実現可能性の確保 (Feasibility) の三点を「みんな」で育むとしています。「みんな」とはすべての当事者のことであり、教職員、子供、保護者、地域住民、地方公共団体職員、民間…（以下略）のことです。ところで Society 4.0 から 5.0 へと移行しつつある現在において一番大切なものはあらゆる人々の well-being ですが、授業や様々な教育活動等は学習者や英語教師がその大きな願いへと向かうための根幹です。

皆様におかれましては、課題に向き合い、方略を考え、「広域ネットワーク」や「組織を活性化させる熱意」によって次世代を切り拓いていくグローバル人財の育成のため引き続きお力を発揮していただきたく存じます。そして、ご自身のすべきこと、また実現したいこと大切にしたいことを対話と協働により、ゆったりとした気持ちで堂々と達成し、組織の一員として、また一個人としても充実した日々を、これからもずっとお送りいただけたらと願います。研究部担当、会長補佐の板垣 繁校長、橋本 晋作研究部長をはじめ、研究部員の日々の研究への感謝を申し上げるとともに、研究のさらなる発展を期待し、また心より敬意を表します。

東京都中学校英語教育研究会
会長 平岡 栄一（葛飾区立常盤中学校）

Ⅱ 昨年度までの研究のあらまし

平成13年度から平成21年度までの9年間にわたり、中学校検定教科書で使用されている語彙リストについて研究を進めた。また、平成22年度から平成25年度までの4年間に研究した辞書指導を基に、平成26年度から平成29年度の4年間で「生徒の語いサイズを広げる指導の工夫」というテーマを設定し、研究を進めた。

平成30年度から令和元年度の2年間は、「基本語いの選定」と「語い指導再考」をテーマに、前者は「研究部基本語い1200」の選定を行い、後者は「新出語いの導入方法の検討」を行った。令和元年度には、話すこと〔やり取り〕における生徒の使用語彙の実態を明らかにし、結果を考察するとともに、「研究部基本語い1200」（研究部、2019）と比較した。また、教科書本文の新出語彙の効果的な導入方法を検討し、指導法の分類を行うとともに、Nation（2007）の the four strands の考え方からどのような語彙を使った活動が必要なのか研究した。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、実会場に集まっての研究活動は休止し、全国英語教育研究団体連合会「東京大会2020大会レガシー」に、これまでの研究成果として『「語い」指導の充実を目指して』を紙面発表した。

令和3年度は、学習指導要領の改訂に伴い、新しい中学校検定教科書（6社）と小学校検定教科書（7社）をすべて調査した。使用されている語彙の重なり度を参考に、「研究部中学校推奨語い1800」・「研究部小学校推奨語い700」を選定し、中学生が身に付けるべき単語を示した。

令和4年度は、中学校検定教科書における発信語彙、中学生が書く活動で使用した語彙の中間報告、「研究部中学校推奨語い1800」「研究部小学校推奨語い700」に基づく実践例を示した。生徒が書いた英作文を分析し、使用した語彙について研究をした。

令和5年度は、「研究部中学校推奨語い1800」に基づいて、語彙指導の実践例を示した。また、生徒が英語で書きたかったけれども書けなかった日本語をトピック別、品詞別に分類をし、生徒が「書きたい語」について研究を進めた。

令和6年度は、生徒が「書きたかったけれども書けなかった語彙リスト」を基に、トピック別の日英対照語彙リストである「自己表現サポート Vocabulary List」（以降、「Vocabulary List」と表記する）を作成した。さらに、その活用事例を部内で共有し、研究を進めた。また、夏季休業中には「第21回研究部ワークショップ」を参集型で2日間開催し、研究部員による指導実践の発表を行った。

以上のように、時世を鑑みて研究テーマを設定し、英語教育現場の指導向上の一助となる情報提供をできるよう努めてきた。

Ⅲ 今年度の研究

1. 研究の動機

今年度の研究の柱は、大きく二点である。

第一に、「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」の活用法に関する研究である。昨年度は、令和5年度の研究において収集した、生徒が「英語で書きたかったけれども書けなかった日本語」のデータを基に、教室指導におけるニーズに即した教材を開発することを目的として、トピック別の日英対照語彙リストである「Vocabulary List」を作成した。これは、本リストを研究紀要に掲載し、多くの教員に授業で活用してもらうことをねらいとしたが、昨年度の研究発表会において、「実際の授業場面での活用イメージが湧かない」「効果的な使い方が分からない」といった意見が寄せられた。これらの指摘を踏まえ、今年度は、部員が自ら授業で「Vocabulary List」を活用し、その実践を集積・分析することを通して、リストの効果的な活用法を明らかにすることを目指した。

第二に、部員の授業力向上を目的とした授業研究である。毎年の研究発表会で報告しているように、研究部は英語教育に関する実践に根付いた研究を推進してきた。その一方、この数年でこれまで研究部を支えてきた先輩が引退し、新たな部員が加わっており、部員の反省で、「研究はもちろん大事だが、本業である授業の質はどうかのだろうか」という視点が挙がった。2010年代前半には、研究部会内で授業を動画で共有し、部員相互で授業を検討することを通して授業力の向上を図っていた時期があった。しかし、その取組を経験した部員は現在在籍しておらず、部員の日常的な授業実践の実態を十分に把握できていないのが大きな課題の一つであった。そこで今年度は、近年研究部に入部した部員が授業提供者となり、毎月の部会において授業動画をを用いた授業研究を行うことで、部員の日常的な授業の質の向上を図る取組を推進した。

2. 「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」の活用法に関する研究

(1) 目的

令和6年度に研究部が開発した「Vocabulary List」(研究部, 2025)を、実際の授業において活用する方法を提案するために、研究部員が授業でリストを活用した実践を部会で共有し、それらの実践から示唆される効果的な活用法について検討する。

(2) 実践報告者

研究部会で実践を報告した部員は、森沢、瀧本、小澤、熊田、多田の5名である。加えて、藤野と福島が書面で実践を報告した。

(3) 方法

実践については、以下の視点で報告した。

- ・ Nation (2001, 2007) の the four strands における分類
- ・ 授業内における指導場面
- ・ 指導手順
- ・ 実践者による感想・振り返り
- ・ 研究部員から出た意見等

実践例を分析する際に参考にした Nation (2001, 2007) の the four strands とは、(ア) meaning-focused input (内容に焦点を当てた受容活動)、(イ) meaning-focused output (内容に焦点を当てた産出活動)、(ウ) language-focused learning (言語要素に焦点を当てた活動)、(エ) fluency development (既習事項を扱った統合的な活動) という授業内活動の分類である。Nation (2001) は、それぞれの分類における活動について、次のような例を挙げている：

- (ア) まとまりのある英語を読み聞かせる活動や、未習語が 2% 程度の文章を読ませる活動
- (イ) トピックに関して調べ、口頭で発表したり、レポートを書いたりする活動
- (ウ) 単語や連語を載せたフラッシュカードを用いた活動や辞書指導
- (エ) リーディング時間を計り、内容確認の質問をし、質問の正答率を記録させる活動

Nation はこの 4 つの分類をバランスよく指導すると良いと提案しているが、研究部 (2020) によると、(ア) meaning-focused input、(イ) meaning-focused output、(ウ) language-focused learning と比べると (エ) fluency development の実践が少ないことが報告されている。この報告と比較することで、リストを利用することによって語彙指導にどのような差異が生じるかについても検討した。

(4) 実践例

各部員が報告した実践は次の通りである。なお、実践例は、the four strands の分類ごとに掲載した。なお、meaning-focused input に該当する実践例はなかった。

(イ) meaning-focused output (1 事例)

実践者氏名	藤野 康明
所属校・対象学年	調布市立第四中学校・第1学年
the four strands における分類	meaning-focused output (内容に焦点を当てた産出活動)
活動名	サイコロスピーチ
授業内における 指導場面	帯活動
指導手順	<p>① サイコロを振り、6つの中からトピックを決める。 (1) Sports (2) Season (3) Free Time (4) After School (5) Last Weekend (6) Yesterday</p> <p>② 4文スピーチを話す前に1分間、「Vocabulary List」の簡易版を見て内容を考える。簡易的なメモはとってよいとする。</p> <p>③ ペアでトピックについて話す。</p> <p>④ (話した英文をノートに書く。)</p> <p>※ 今回は帯活動のスピーチを行ったが、書く活動につなげる予定 また、スピーチ(文章)の構成について指導を行った。</p> <p>1文目：テーマに対するメインアイデア 2文目：理由や根拠、具体① 3文目：理由や根拠、具体② 4文目：自分の考えや気持ち</p> <p>例 (1) Sports I play tennis. I'm in the tennis club. We play tennis on Monday, Tuesday and Saturday. I like playing tennis.</p> <p>例 (2) Season My favorite season is summer. I like swimming in the sea. I go swimming with my family every summer. I want to go to the sea next summer.</p> <p>※ 英文を話す(書く)前の構成を考える際に「Vocabulary List」を見せることにより、言いたい(書きたい)が、思い出せない表現を思い出すきっかけとした。「Vocabulary List」は、Sports, Season, Free Time, Weekend から、生徒の実態に合わせて語彙レベルを調整し、編集して活用した。</p>
実践者による 感想・振り返り	<p>学習内容の習得速度が速い生徒には効果がある。「Vocabulary List」を見て表現を思い出す場面や言いたい内容が変わることもあった。一方で、学習内容の習得に時間がかかる生徒には難しかった。練習していない語彙は発音できず、内容が思いつかないことも多い。また、簡単な英語で表現することで精一杯で、「Vocabulary List」を読むまでに至らなかった。</p>

(ウ) language-focused learning (3事例)

実践者氏名	小澤 美沙姫
所属校・対象学年	杉並区立泉南中学校・第1学年
the four strands における分類	language-focused learning (言語要素に焦点を当てた活動)
活動名	「夏休みにしたいこと」についてペアで話す活動
授業内における 指導場面	帯活動
指導手順	<p>① 教師は生徒に「夏休みにしたいこと」について質問する。</p> <p>② 教師の「夏休みにしたいこと」について話す。</p> <p>③ 生徒はペアで「夏休みにしたいこと」についてお互いに伝え合う。 (1回目)</p> <p>④ どのようにしたら会話が続くか全体で共有する。【中間指導】</p> <p>⑤ 生徒はペアで「夏休みにしたいこと」についてお互いに伝え合う。 (2回目) ←この際、「Vocabulary List」と教科書巻末の語彙リストより選別した語彙を記載したワークシートを配布し、必要であれば使用するよう伝える。</p> <p>⑥ 1～2組の生徒に全体で発表させる。</p> <p>※ 以降、本文のトピックに入る。</p>
実践者による 感想・振り返り	<p>「Vocabulary List」を使用するにあたり、動詞や名詞単体よりも、動詞＋名詞等、まとまっていた方が生徒が使いやすいと感じたため、今回は「Vocabulary List」(Vacation)をそのまま使用するのではなく、いくつかの語彙を選別してワークシートを作成した。</p> <p>「Vocabulary List」を使用した結果、教師のワークシート作成の参考にはなるが、会話活動で使う場合、教科書巻末の語彙リストの方がすぐに使いやすいと感じた。教科書の語彙リストは、細かく分類されており、イラストも付いているため、生徒がそのまま使用しやすいからである。</p>
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的にどのようなワークシートを作成したのか。 → “I want to ~.” の後に動詞や名詞を当てはめれば、「自分がしたいことを伝えられるような工夫を行った。 ・ 実践例を聞き、「Vocabulary List」が動詞＋名詞等とまとまっていた方が使いやすいということに納得した。

実践者氏名	熊田 昌子
所属校・対象学年	大田区立蒲田中学校・第1学年
the four strands における分類	language-focused learning (言語要素に焦点を当てた活動)
活動名	移動教室の思い出ライティング活動
授業内における 指導場面	テスト前の過去形の復習と本文の復習を兼ねたライティング活動
指導手順	<ol style="list-style-type: none"> ① ライティングの手順が書かれたワークシートと、「Vocabulary List」(Vacation)のみを印刷したワークシートを配布する。 ② 「Vocabulary List」がどのようなものなのか簡単に説明する(語順を確認する、語彙を使用できる等)。 ③ 自分が書きたい内容について、生徒が使用できそうな語彙があったら使うように指示する。 ④ 語彙を並べる順番が分からなくなったら、「Vocabulary List」の例を参考にして書くよう指示し、始めさせる。 ⑤ 手がとまってしまう生徒もいるため、間違えてもいいので書きたいことを書いてみるよう前向きな声掛けを十分に行う。 ⑥ 書きたかったけれど書けなかった文を日本語で書かせる欄を設け、多数が書きたかった文については、後日全体で共有する。
実践者による 感想・振り返り	<p>机間指導をした際、想像以上に「Vocabulary List」を使用している様子が見てとれた。使用したい語彙に○を付けている生徒や、使用できそうな語彙を探し、その語彙を例文の語順通りに当てはめてみて使えるか探っている生徒もいた。</p> <p>授業後に行ったアンケートから、予想以上に生徒が「Vocabulary List」を活用してライティングを行っていたことが分かった。「使えそうな単語を見つけて使用した」「移動教室に特化した単語がもっと欲しかった」等の意見が見られた。一方で、トピックを極端に絞った英作文での使用には向かず、ある程度大きな枠組みをもった活動での使用が適していると感じた。</p>
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマが狭い場合、生徒が使用したい語彙が限られてくる傾向があり、中々使用しづらいという難しさがある。 ・語順を調べるために「Vocabulary List」を使用している生徒はあまり多くなかった。学習内容の習得に時間がかかる生徒の生徒たちは品詞が分からないため、「Vocabulary List」を使用する際には教師による足場かけが必要かもしれない。

実践者氏名	森沢 俊彦
所属校・対象学年	日野市立日野第三中学校・第1学年
the four strands における分類	language-focused learning (言語要素に焦点を当てた活動)
活動名	理想の家族を紹介しよう
授業内における 指導場面	スピーキング (発表) 活動
指導手順	<ol style="list-style-type: none"> ① グループで家族構成を相談しながら表に記入し、メンバー同士が“Who is this?” “He is...”等の基本表現を使って人物像を整理する。 ② 提示した形容詞・動詞リストから適切な語彙を選び、家族一人一人の特徴を英語で表現する練習を行う。 ③ グループごとに “We want to introduce our dream family.” という枠組みで発表し、クラス全体でどの家族をCMに採用するか投票する。
実践者による 感想・振り返り	教科書だけの表現ではなく、よく使う語彙を「Vocabulary List」で見、使えそうな語彙を選んで使う生徒が見られた。すべて自分で調べて内容を考えるのはハードルが高いため、辞書の 카테고리別に分けられた表から使えそうなものを自己選択することも、生徒の主体的な学習には必要だと感じた。また、生徒は楽しみながら英語表現を使うことができ、振り返りでは多くの生徒が自力で紹介できたと感じていた。
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・品詞別にもなっているので、活用しやすいのではないか ・動詞を多めに準備したのは中学生にとっては使いやすかったのではないか。

(エ) Fluency development (3事例)

実践者氏名	瀧本 廣樹
所属校・対象学年	東京都立大田桜台高等学校・第2学年
the four strands における分類	fluency development (既習の内容を使った統合的な活動)
活動名	OREO (Opinion / Reason / Explanation / Opinion) writing
授業内における 指導場面	生徒が書きたい語彙が書けないときや語順が分からないとき
指導手順	<p>① 教師は、“Do you think it's a good idea to study online?” という質問を生徒にする (30秒)。</p> <p>② 教師の質問に対して、生徒にペアで聞き合うように指示を出す。列ごとに、Question と Answer に分けて、横のペア同士で質問させる。Question 側の生徒は、教師と同様の質問をし、Answer 側の生徒は、この質問に Yes か No で答える (30秒～1分)。</p> <p>③ 教師は生徒に、“Why?” と質問し、考える時間を取る。この際に、生徒同士で話し合っても良いとする (1～2分)。</p> <p>④ 教師は、②のペアで、再度 “Do you think it's a good idea to study online?” という質問をするように指示を出す。今度は、Answer 側の生徒が Yes/No で答えた後に Question 側の生徒が、“Why?” と質問を続け、生徒に答えさせる (2～3分)。</p> <p>⑤ 教師は生徒に、文章にするように指示を出す。この際に、語順ナビの品詞の順番の確認と、「Vocabulary List」が種類別に分けられていることについて説明し、使用することを促す (3分)。</p>
実践者による 感想・振り返り	<p>生徒の英語習熟度および授業へのエンゲージメントの高さに応じて、語順ナビや「Vocabulary List」の活用状況に差が見られた。英語の習熟度が低い生徒では、品詞の意味理解や、掲載されている語彙をどの場面で使用するかの判断に困難を感じる傾向があった。また、パソコンやスマートフォンの操作に慣れている生徒にとっては、紙面で情報を見つけることに慣れていない生徒も多く、すぐに答えが見つからない場合に不満を示したり、取り組まなくなったりする場面も観察された。</p> <p>以上のことから、語順ナビと「Vocabulary List」の実用性を高めるためには、生徒自身がそれらを「使えるもの」と実感できるようにすることが、重要であると考えられる。</p>
研究部員から 出た意見等	<p>・なぜ英語の習熟度によって、語順ナビや「Vocabulary List」に対する姿勢が変わるのか。</p> <p>→習熟度によって、語順ナビや「Vocabulary List」の活用状況に差が見られるからである。今後は、生徒にとって、さらに使いやすいものにしていくことが重要であると考えられる。例えば、語彙を和訳から検索できるようにする等が考えられる。</p>

実践者氏名	多田 翔
所属校・対象学年	江東区立第三砂町中学校・第2学年
the four strands における分類	fluency development (既習の内容を使った統合的な活動) meaning-focused output (内容に焦点を当てた受容活動)
活動名	one minute speaking
授業内における 指導場面	帯活動
指導手順	<p>① 本日のトピックを提示する (一つのトピックにつき3回実施)。 → 研究部で作成した9つのトピックを使用する。 (1) Sports (2) Food (3) Season (4) Free Time (5) My Favorite Person (6) My Favorite Place (7) My School (8) Vacation (9) Weekend</p> <p>② 60秒間マインドマッピングする時間を与え、メモを取らせる。</p> <p>③ ペアで先行・後行を決め、先行から開始する (後行はワークシートに発話語数をカウントしながらリアクションをする)。</p> <p>④ 1分間話し終えたら、WPM (Words Per Minute) をメモし、相手に、話した内容に関連する質問を行う (即興的なやり取り)。</p> <p>⑤ 上記の手順で先行・後行を交代する。</p> <p>※ 毎回の授業で5分以内の実施とする。 ※ 活動前に「目標発話語数」を設定させる。 ※ 各トピックの2回目には、語順ナビ、「Vocabulary List」を配布する。</p>
実践者による 感想・振り返り	<p>今後も、コミュニケーションな英語授業を目指し、「ピア・インタラクション」「質の高いインプット活動 (点→線→面)」「自分ごととして捉える」等を重視した授業作りを心がけていく。</p> <p>また、より良い聞き手を育てるためにも、発話語数カウントを省略し、その代わりに「相手の発話内容」に意識が向かうスピーキング活動に昇華する必要性を実感することができた。生徒の実態に応じて、目的意識を持ち、効果的に実践を行っていきたい。</p> <p>さらに今回の授業実践を通して、以下の二点を実感した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インタラクションの際、無理に思考ツールを活用せずに、まずは即興で自由に発話させること 2. 生徒に思考ツールを活用させる際は、主にモノローグの作成時に重点を置くこと <p>これらの経験を通じて、学習者の思考を「広げて」かつ「深める」ためのツールのあり方について考える良い機会となった。</p>
研究部員から 出た意見等	<p>・Nationのthe four strandsに関して、発話の流暢さを重視しているため fluency development に分類したが、これから先、「相手意識」を持たせ、より意味 (内容) に焦点を当てた活動にすることで、meaning-focused output に結びつくのではないかと。</p>

実践者氏名	福島 恵子
所属校・対象学年	清瀬市立清瀬第三中学校・第1学年
the four strands における分類	fluency development (既習内容を使った統語的な活動)
活動名	What do you do in your free time?
授業内における 指導場面	復習
指導手順	<p>① トピックと目的・場面・状況を提示する。 「“What do you do in your free time?” 生徒は暇なときに何をするかを ALT が知りたがっています。メモで渡せるように、話題を一つに絞って、英語で書いてみましょう。3文で20語程度とします。」 ※この説明の後、教師は「Vocabulary List」を配布する。</p> <p>② 生徒は自分の創作ノート（作文専用ノート）にマッピングをする。 ※マッピング終了時に、教師は語順ナビについて説明する。</p> <p>③ 生徒は創作ノートに Opening, Body, Ending を考えて英文を書く。</p> <p>④ 生徒は創作ノートに書いた作文をペアでアドバイスし合う。 ※生徒はペアの相手のエラーを指摘したり、互いにアイデアを出し合ったりする。</p> <p>⑤ 生徒はアドバイスをもとに自分の英作文を再検討する。</p> <p>⑥ 生徒はできた作文を教師に提出する。</p> <p>⑦ 教師とやり取りした後、生徒は推敲する。 ※教師は生徒の考えを聞き出しながら、訂正は最小限とする。</p> <p>⑧ 生徒は創作ノートに清書する。</p> <p>⑨ 生徒の作品を全体で見合い、相互評価をする。 ※生徒は机に自分の創作ノートを置き、他の生徒の英作文を見る。</p>
実践者による 感想・振り返り	<ul style="list-style-type: none"> これまでスピーキングで行ってきた「放課後の活動」「週末の過ごし方」についてはすぐに反応できたが、「暇なときにすること」では思いつかない生徒も見られた。そのような生徒は、マッピングの段階で、「Vocabulary List」を眺め、話題や書く内容を決定していた。 「Vocabulary List」については、名詞単体よりもフレーズとして提示されることの必要性が高いことが示唆された。例えば SNS という名詞だけでは、英語で表現は分かってもすぐに活用することはできない。生徒は、「SNS をチェックする」等、動詞との組み合わせを考えたり、調べたりして、使用していた。 「Vocabulary List」と同じ文型を現在形で生徒に示したところ、生徒はこれをよく活用していた。 「Vocabulary List」では、コロケーションまで含まれていると、より実践的な活用が可能になると感じた。

(5) 考察・教育的示唆

実践を共有し部員同士で協議した結果、得られた考察および教育的示唆は次の通りである。

(ア) 「書くこと」に留まらない「話すこと」の活動におけるリストの利用

「Vocabulary List」は、書く活動において生徒が書きたくても書けなかった表現をもとに作成された。しかし、書く活動だけでなく話す活動においても活用できることが、実践の共有により示唆された。しかし、話す活動においてリストを使用する際には、語彙を生徒が音声化して発話に用いることができるかという視点を見落とさないように留意しなくてはならないことが、協議の中で話された。「Vocabulary List」は、生徒が書きたかったけれども書けなかった語を基に作成されているため、教科書等を通して活動までに音声に触れてきていないことが考えられる。外来語由来のカタカナ語が発音上の大きなヒントになることも考えられるが、教師による指導やICT機器の活用等を通して、正確な発音に触れる機会が与えられるような指導の工夫が求められる。

(イ) 多様な授業場面における利用の可能性

帯活動、導入、復習等、多様な場面で語彙リストが活用できることが明らかになった。語彙を導入するタイミングは、教師によってある程度は固定化されているかもしれない。しかし、「Vocabulary List」を使用するタイミングは、生徒がある語彙を使いたいと思うニーズが高まったときであるため、より生徒中心に検討することが求められる。リストを提示する適時を教師が予想するとともに、授業中の生徒の様子を観察して、柔軟に使用することができるような「Vocabulary List」の活用方法を検討する必要があるだろう。

(ウ) the four strands の視点から

今回の7つの報告を the four strands の視点で分類すると、meaning-focused output が1事例、language-focused learning が3例、fluency development が3例だった。研究部(2020)は、授業内における語彙指導を the four strands を基に分類した結果、fluency development に関する指導が少なかったと報告した。Nation(2001, 2007)がこの4分類をバランスよく授業に取り入れることを推奨していることを考えると、「Vocabulary List」を用いた指導を授業に取り入れることは、授業内活動の偏りを解消する上でも有効であることが示唆された。

その一方、meaning-focused input に分類される例がなかった。「Vocabulary List」を利用した語彙導入は性質上、豊かな文脈の中で意味を中心に語彙を導入するものではないため、meaning-focused input には分類されにくいことが考えられる。しかし、文脈から切り離し、語彙リストのみで学習するのではなく、オーラルイントロダクションや長文の中といった文脈の中で語彙に触れることにも、語義の推測を促したりコロケーションを学んだりする上で意義があることから、その指導のバランスには留意しなければならない。

3. 研究部員の授業力向上を目指した授業研究

(1) 目的

研究部員の授業力向上を目指した授業研究を行い、部員の日常的な授業の質の向上を図ることにより、授業研究を進めるにあたっての視点や今後の可能性についても検討する。

(2) 授業報告者

研究部会で実践を報告された内容と報告者は、次の通りである。

5月：Lesson 3 “Hot Sport Today” <i>Sunshine English Course 3</i> （開隆堂）	第3学年（熊田）
6月：Lesson 1 Part 1 “Play me, I’m Yours” <i>Power On 1</i> （東京書籍）	第2学年（瀧本）
7月：Unit 4 “Our New Friend” <i>Here We Go! English Course 1</i> （光村図書）	第1学年（小林）
9月：Unit 4 “Tour in Singapore” <i>Here We Go! English Course 2</i> （光村図書）	第2学年（森沢）
10月：Lesson 6 “Imagine to Act” <i>New Crown English Series 3</i> （三省堂）	第3学年（多田）

(3) 方法

毎月の研究部会では、次の方法で授業を分析し、協議した。

- ① 動画視聴前に、授業報告者より概要と授業視聴の視点を伝える。
- ② 10分～15分の間、授業動画を視聴する。
- ③ 授業報告者より、授業について補足する。
- ④ 全体協議の前に、部員同士がペアになって意見交換する。
- ⑤ 全体で協議をする。

なお今年度は、英語で授業を展開する力を見取る材料として、導入場面における指導力に着目し、新出文法や教科書本文を教師が口頭導入する場面を中心に視聴した。

(4) 授業内容概要

各部員が報告し、部内で検討した授業は次の通りである。

(ア) 授業1

授業者氏名	熊田 昌子
所属校・対象学年	江戸川区立南葛西第二中学校（前任校）・第3学年
単元名	Lesson 3 “Hot Sport Today” <i>Sunshine English Course 3</i> （開隆堂）
単元目標	自分が今、熱中しているものをポスターに書いて友達に紹介することができる。
本時の目標	友達に自分を幸せにすることについて聞いたり、理由を付けて質問に答えたりすることができる。
指導手順 (略案)	<p>① 教師のスマールトークで、先週末のできごとと、大好きなキーホルダーをなくした話から、教師を幸せにするものを聞き取り、～makes me happy. の意味に気付かせる。</p> <p>② スライドに、様々なキャラクターや、サッカー、音楽等の画像を並べ、教師が指したものについて、パターンプラクティスのようにリピートさせ、形式に慣れさせる (Playing soccer makes me happy. 等)</p> <p>③ 慣れてきたところで、生徒に“What makes you happy?” と振り、ペアで聞き合うよう指示を出す。相手に尋ねる際には、理由を付けて答えさせる。</p>
授業者による 感想・振り返り	<p>自然な会話を通して文法項目を導入する工夫を行った。文法項目は比較的容易であったため、生徒は文の意味に気付くことができ、口頭練習も円滑に進められた。パターンプラクティスを重要と考え、取り入れていたが、部員との協議を通して、「生徒にとって意味のある英語を話させる」ことの重要性についても改めて考える機会を得ることができた。今後は、「生きたことば」を用い、生徒が本当に関心のある内容や話したい、相手に伝えたい内容について話ができるような口頭練習となるよう工夫していきたい。</p>
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・ テンポ良く進められていた点が良かった。 ・ 導入した文の意味を明示的に示すタイミングについて、様々な意見が出た。 ・ 個人→教師→全体という流れよりも、個人→ペア→全体→個人の流れで教師が随時サポートしていくことが大事。 ・ 「生きたことば」という視点に着目して授業を考えると良い。生徒に、“Seeing movies makes me happy.” と復唱させていたが、目的語は生徒からすれば、先生は you なので、復唱させている言葉に意味が伴っていないことになっていた。他にも、“Does anyone like ~?” と聞き、そこで手が挙がった生徒について、“～ makes ○○ happy.” という練習にすれば彼らの本当の気持ちに近づけたのではないか。

(イ) 授業2

授業者氏名	瀧本 廣樹
所属校・対象学年	都立大田桜台高等学校・第2学年
単元名	Lesson 1 Part 1 “Play me, I’m Yours” <i>Power On 1</i> (東京書籍)
単元目標	ストリートパフォーマンスに関する意見を表現できる。
本時の目標	ストリートピアノについて理解し、自分の意見を2文以上書く。
指導手順 (略案)	<p>【導入 10分】</p> <p>① 単元の目標を英語で提示し、意味を確認する。</p> <p>② ピクチャーカードを使って本文を導入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問文と絵を提示し、本文に関する英語の発問を3つ行う。その際は、Yes/Noだけでなく、文で答えさせるようにする。 ・デジタル教科書の教科書音声をも2回聞き、本文内容を聞いてから質問を3つさせる。do, should, canのYes/Noの疑問文の切り替えしを通して、助動詞の疑問文のルールを意識させる。 ・問3で、答えが出てこない場合、もう一度ペアで音読させる。読み終わったら答えに関して話し合うように促す。 ・問3で、フラッシュカードを使い、本文への理解を促す。 <p>例： Q1: Do you like street performance? (Yes / No) Q2: Should they play the piano there? (Yes / No) Q3: What meaning can street performances have?</p> <p>【展開 35分】</p> <p>③ 「Flash Card」：絵と簡単な英語を用いたスライドを見て復唱する。</p> <p>④ 「New Words」：読んだ語彙を2～3回ワークシートに書く。</p> <p>⑤ 「Guess」：絵だけ見て、本文の中で出てきた語彙を予想して書く。</p> <p>⑥ 「Listening」：本文を聞く。</p> <p>⑦ 「Filling in the gap」：文中の代名詞が指すものを本文から見つける。</p> <p>⑧ 「Chorus Reading」：音読練習をする。</p> <p>⑨ 「Grammar」：新出文法を本文の例文を交えて、日本語で説明する。</p> <p>【振り返り 5分】</p> <p>⑩ 宿題の説明（文法内容に関するドリル形式の問題を解く）</p> <p>⑪ 時間があれば、追加の問題を解く時間をとる。</p>
授業者による感想・振り返り	文法導入では文法構造、音読では発音、「Flashcard」から「New Words」の流れでは意味を理解させることを意識して実践する必要があると感じた。
研究部員から出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の展開やそれぞれの目標との繋がりを見直す必要がある。 ・ フラッシュカードの活用方法を再検討するべきではないか。 ・ オールイングリッシュのペースや話し方に課題がある。 ・ 生徒が既に知っている語彙を中心に使用していくべきではないか。

(ウ) 授業3

授業者氏名	小林 竜也
所属校・対象学年	千代田区立九段中等教育学校・第1学年
単元名	Unit 4 “Our New Friend” <i>Here We Go! English Course 1</i> (光村図書)
単元目標	身近な人物の特徴を説明するために、伝えたい情報を整理し、必要な情報を相手に発表することができる。
本時の目標	自分と相手以外の人やものについて尋ねることができる。
指導手順 (略案)	<ol style="list-style-type: none"> ① 帯活動、英語の歌、QA シート ② 前時の復習：前時の内容を生徒とのやり取りを通して確認する。 ③ オーラルイントロダクション、文法導入 ④ 教科書リスニング：リスニングポイントを提示し、聞き取らせる。 ⑤ 教科書表現確認：新出語を辞書を用いたり、生徒とのやり取りをしたりして、確認する。 ⑥ 音読活動：Chorus, Overlapping, Square, Shadowing の順で練習する。 ⑦ 発表練習：次回、本文のスキットを行うため、練習をする。目的・場面・状況に応じた追加のオリジナル文を追加させる。
授業者による 感想・振り返り	<p>授業の展開方法や進行スピードに課題があると考えられる。今後は、一つ一つの活動のねらいを再確認し、学習者にとって有意義な活動となるように工夫する必要がある。また、授業者が過度に教えすぎないように留意する。さらに、参考文献を十分に読み込み、授業者自身が継続的に学習する姿勢を持つことが求められる。</p>
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜその活動をするのか、その意味を改めて考える必要がある。 ・多様な音読方法を取り入れていたが、音読の順序についても学習者目線で違和感のないように設定することが、より効果的な学習に繋がる。 ・視覚教材を一定時間提示することで、学習者は内容を視覚的に理解できる。また、学習者が英語の音声を発する際、意味を理解した状態で行う方が、「生きたことば」として記憶に残りやすいと考えられる。 ・1時間で導入、次の1時間で発表というスピード感の中で活動内容を充実させるためには、学習者のレベルに応じた難易度の活動に絞って展開することも考えられる。 ・各活動を授業者も学習者も「こなさなければならない」と意識してしまうと慌ただしく終わってしまう。そのため、音読で終わるのではなく、別の活動を取り入れることも検討すべきである。

(エ) 授業4

授業者氏名	森沢 俊彦
所属校・対象学年	日野市立日野第三中学校・第2学年
単元名	Unit 4 “Tour in Singapore” <i>Here We Go! English Course 2</i> (光村図書)
単元目標	スリランカの学生とのオンライン交流を成功させるために、旅行先での出来事やグルメの紹介記事等から必要な情報を読み取り、魅力が伝わるように日本の文化を伝えることができる。
本時の目標	Unit 4-4「人にもものを～する」という表現を確認し、新出語と教科書本文を音読し、基本文を使うことができる。
指導手順 (略案)	① 教師の話聞いて内容を思い出す活動：ピクチャーカードを用いて内容を確認する。 ② 新出語の指導：発音→意味→意味を見て、発音の確認→個人練習 ③ 本文の意味を確認 ④ 教科書本文の音読：全体→個人で練習する。
授業者による 感想・振り返り	教科書内容を音声を通して理解させ、音と文字を一致させた上で音読に結びつなげる活動を、準備時間とのバランスを考えながら効果的に実践することに難しさを感じた。本校の生徒は音声中心の指導だけでは記憶に残りにくい傾向があるため、本実践では音読の後にターゲットセンテンスを書き取らせ、その文の解説を行い、ノート作りを通して学習内容の定着や、振り返り学習を可能にする工夫を行った。しかし、やや難易度の高い活動であったことから、手順や時間配分については再考の余地があると感じた。
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 説明が長く一方的なので投げかけを増やし、生徒の参加度を高める必要がある。 ・ 内容理解に応じて、音声再提示・語彙レベルの確認等柔軟にする。 ・ 語彙指導と音読の手順整理として、意味確認を先にし、音読と切り離して負荷を下げる。 ・ 書く活動は、十分なインプットと音読練習の後に設定する。 ・ 自力音読は 2年生には負荷が高いため、復唱から音読の土台作りが必要である。 ・ オーラルイントロダクションでは、聞くだけでなく、簡単な応答や語彙を引き出す等の活動で生徒を巻き込むことが大切である。 ・ アウトプット強化として、言い換え、ペア活動、短い発話等、段階的アウトプットを追加する。

(オ) 授業5

授業者氏名	多田 翔
所属校・学年	江東区立第三砂町中学校・第3学年
単元名	Lesson 6 “Imagine to Act” <i>New Crown English Series 3</i> (三省堂)
単元目標	江東区の英語学芸会の舞台で「想像力」をテーマにした英語スピーチをするために、自分なりに工夫したメモを参考にして、相手に伝わる発表をすることができる。
本時の目標	想像力がテーマのスピーチメモを即興で作成し、簡単な発表をすることができる。
指導手順 (略案)	<p>【導入 (10分)】</p> <p>① 宿題の確認 (前時に課した宿題点検)</p> <p>② QA 活動 (学習の流れ確認、授業者-生徒間のやり取り)</p> <p>③ one minute speaking 【マインドマッピング】 (1分間)</p> <p>④ 本時の目標の確認</p> <p>【展開 (35分)】</p> <p>⑤ オーラルイントロダクション (ピクチャーカード・動画の投影)</p> <p>⑥ 単元目標の確認 (事前に撮影した ALT 動画の視聴)</p> <p>⑦ 即興的な発表練習 (スピーチメモの作成、即興的な発表練習)</p> <p>【まとめ (5分)】</p> <p>⑧ 振り返り (シートの記入)</p> <p>⑨ 宿題提示 (次回授業の見通し)</p>
授業者による 感想・振り返り	<p>今回は、第一時 (導入回) の授業実践を見ていただいた。その中で、「単元の目標 (=大目標)」と「本時の目標 (=小目標)」という捉え方や「目標の自己決定 (=個別目標)」といった視点について学ぶことができた。また、第一時と単元末の (自己表現) 記録の比較・分析をさせることで、学習者自らが変容に気づき、これからの英語学習に対する動機付けに繋がることを学んだ。</p> <p>以上の点を踏まえ、これからの授業改善に結びつけていきたい。</p>
研究部員から 出た意見等	<ul style="list-style-type: none"> 思考ツールを「階層式マインドマップ」に変更することで、思考の整理に深みが生じる。 ディスコースマーカーの指導をすることで、より効果が高まる。 発話流暢性を高めるために、Nation の 4-3-2 理論が効果的である。 コミュニケーションのためのスピーキング指導において、相手の発話「内容」に注目させる指導が大切である。

(5) 考察・教育的示唆

本授業研究を通して得られた最大の成果の一つは、「良い授業とは何か」という根源的な問いを、改めて多面的に捉え直す契機を提供できた点にあると考えられる。授業デザインや導入場面に焦点を当てた実践の共有は、単なる手法紹介にとどまらず、授業全体を俯瞰的に見直す視点を参加者にもたらした。

まず、若手教員にとっては、多様な授業デザインや授業展開のパターンを知る貴重な機会となったといえる。教育現場においては、授業の基礎・基本を体系的に学ぶ機会が必ずしも十分とは言えず、個々の経験に依存した授業観が形成されがちである。そのような状況の中で、実際の授業を事例として共有し、導入や動機づけの工夫、授業全体の流れを可視化することは、若手教員が自身の授業を相対化し、次の実践に活かすための重要な手がかりとなる。

一方、中堅からベテラン教員にとっては、授業研究や研究授業を「運営する立場」としての示唆が得られた点が意義深い。授業の導入における傾向や工夫は確かに重要であるが、授業は導入だけで成立するものではなく、単元や一時間内における有機的な繋がりがあってこそ、学習に意味が生まれる。本研究では、導入を起点としながらも、帯活動や展開、まとめへと続く一連の流れをどのように設計するかという視点の重要性が再確認された。今後、場面ごとに整理された実践報告が蓄積されれば、より実践的な知見として共有可能になると考えられる。

また、授業を見る側の視点の転換も、本研究の重要な示唆である。教師は往々にして「どのように教えるか」に意識が向きがちであるが、学習者が置かれている状況や学習環境、授業中に何を感じ、何を身に付けたいと考えているのかといった視点から授業を捉えることが求められる。できるだけ多くの授業を観察・検討することは、教師自身の授業観を更新し続ける上で不可欠である。

さらに、英語で授業を運営する力、すなわち指示の出し方や用いる英語が学習者にとって意味のあるものになっているかという点も、今後の課題として浮かび上がった。教師が身に付けさせたいと考える力と、学習者自身が身に付けたいと感じている力との間には、しばしばずれが生じる。そのずれを丁寧にすり合わせていく視点こそが、研究部として大切にすべき観点である。

以上より、本研究は、授業デザインの具体的な手法を共有するだけでなく、教師一人一人が自らの授業を省察し続けるための視点を提供するものであったと結論づけられる。今後も、授業の繋がりを意識した実践と、その検討を継続的に行うことが、より質の高い授業作りに繋がると考えられる。

IV 今後の課題

今年度の二つの研究が、いずれも教室内の実践に強く結びついていたことは、研究成果の受け手が中学校で日々指導を行う英語教師であることを考えると、明日の授業に示唆を与える上で非常に有意義なものであったと考えられる。研究の二つ目の柱であった研究部内での授業研究については、今後も引き続き取り組み、授業観察や協議を経て得た示唆を共有していきたい。視聴する授業場面については、導入以外の場所についても研究が進められるよう、検討していく。

一方、「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」に関する研究については、新たな研究へと発展させていく必要を感じている。これまで数年にわたり、生徒が実際に書いた英語表現を基に多面的に研究を進めてきた。トピックを示し、制限時間内に生徒が書き出した文章を語彙の視点から分析し、品詞ごとの割合を基に語彙使用の傾向を明らかにしたり、使用頻度が高い語彙を抽出して語彙リストを作成したりしてきた。今年度は、これらの研究をより実践に近づけるため、研究部員が実際に「Vocabulary List」を使用することで、研究成果をどのように実践に繋げていくかの一例を示すことができたと考えている。今後は、今年度の研究までの過程で得た研究成果を実践に繋げていくという視点を見失うことはないよう留意しつつ、改めて別の視点から研究を始めていきたいと考えている。

V 参考文献

- Nation, I. S. P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.
- Nation, I. S. P. (2007). The Four Strands. *International Journal of Innovation in Language Learning and Teaching*, 1 (1), 2-13. <https://doi.org/10.2167/illt039.0>
- 東京都中学校英語教育研究会研究部 (2020) 「語いと英語教育 (42)」
- 東京都中学校英語教育研究会研究部 (2025) 「語いと英語教育 (47)」

VI 研究部のホームページについて

研究部ホームページでは、皆様に本研究部の活動や研究内容をより深くご理解いただけるよう、これまでの研究部の歩みや研究紀要を公開しております。また、研究部ワークショップおよび研究発表会に関する情報についても随時お知らせしております。

研究部ホームページをご覧になる際は、下記の URL よりご利用ください。

今後も内容の充実を図り、分かりやすく最新の情報を発信してまいりますので、引き続きご利用いただけますと幸いです。よろしくお願い申し上げます。

研究部ホームページ URL

<https://sites.google.com/view/tokyo-chueiken-kenkyubu>

Ⅶ あとがき

令和7年度の東京都中学校英語教育研究会 研究部は、昨年度に引き続き、毎月の部会(12回)、研究部ワークショップ(2日間)、公開授業・研究発表会を、すべて対面で実施することができました。

本年度は、発信語彙リストの活用に関する研究と授業力の向上に関する研究との二つの研究を行いました。

まず、発信語彙リストの活用に関する研究では、昨年度の研究として、書くことの活動において生徒が「英語で書きたかったものの書けなかった日本語」に着目し、それらをトピック別に整理しました。その上で、英語の語順を踏まえた「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」を作成・提示しました。今年度は、このリストを部員が授業で実際に活用する中で明らかになった利点や課題を報告することにより、先生方の来年度以降の授業実践にご活用いただくことを目的としています。

続いて、授業力の向上に関する研究では、研究の大前提となる授業力に焦点を当て、毎月の部会において部員相互で授業動画を参観し、協議をすることで授業実践報告を行いました。これらの実践を踏まえた研究を基に、効果的な指導方法について議論・考察を深めるとともに、授業を捉える視野を広げることにも繋がりました。

研究部の研究活動は、皆様からのフィードバックをいただくことで、さらに発展していくものと考えております。本研究冊子『語いと英語教育(48)』をご覧ください、忌憚のないご意見・ご質問をいただければ幸いです。なお、本冊子は令和2年度より紙媒体からデジタルファイルでの発行となっております。都中英研のホームページおよび研究部のウェブサイトよりダウンロードしてご覧いただけます。ぜひ、各地区の教育研究会やお知り合いの先生方にご紹介ください。

公開授業・研究発表会は、一昨年度に4年振りに対面での実施を再開しました。研究部の公開授業・研究発表会は、都中英研全体の行事としての位置付けもあり、新型コロナウイルス感染拡大以前(2019年まで)は、研究部員と研究部員以外の部員が、ほぼ隔年で公開授業を担当してきました。今年度は、研究部員である多田 翔先生(江東区立第三砂町中学校)が担当しました。研究発表会・公開授業の実施にあたり、会場をご提供いただいた江東区立第三砂町中学校の皆様、研究活動および授業についてご指導いただいた和田 玲先生、日頃より研究部の活動をご支援いただいている都中英研役員会の皆様、ならびに研究部ワークショップおよび研究発表会にご参加いただいた都中英研会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

昨年度まで本研究部を支えてくださった溪内 明部長の後を継ぎ、今年度から部長を拝命いたしました。当面の目標は、研究部員の増員を図るとともに、授業力および研究の質を高めることで、都全体の英語教育の発展に少しでも寄与することです。ぜひお気軽に研究部の門を叩いていただけると幸いです。

令和8年2月20日

東京都中学校英語教育研究会 研究部
部長 橋本 晋作(渋谷区立松濤中学校)

巻末資料 1

東京都中学校英語教育研究会
研究部のあゆみ

東京都中学校英語教育研究会・研究部では、1976年（昭和51年）より語彙指導に関する研究や実践発表を中心に活動している。毎年2月に研究発表と研究授業（公開授業）を実施し、研究冊子「語いと英語教育」を発行している。

1976（昭和51）年度 「英語教師のニードとその資料源」

研究授業者：森永 誠（北区立赤羽台中学校）

指導講師：福田 大昭（都立教育研究所）

1977（昭和52）年度 「英語教師のニードとその資料源 その2」

「外来語と英語教育（1）」

－小学校高学年教科書に現れた外来語リスト－

研究授業者：里見 光昭・宗政 剛郷（千代田区立麴町中学校）

指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）

1978（昭和53）年度 「外来語と英語教育（2）」

－中学校英語教科書に現れた外来語リスト－

研究授業者：野中 清（江東区立深川第二中学校）

指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）

1979（昭和54）年度 「外来語と英語教育（3）」

－外来語の強勢付加によっておこる変化－

研究授業者：萩野 浩・須田 昌義（千代田区立一橋中学校）

指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）

1980（昭和55）年度 「外来語と英語教育（4）」

－英語の意味別頻度と外来語・英語の意味とのかさなり－

研究授業者：後関 正明（墨田区立両国中学校）

指導講師：森住 衛（大妻女子大学）

1981（昭和56）年度 「外来語と英語教育（5）」

－フォニックス（つづり字と発音のルール）－

研究授業者：小林 幸子（千代田区立練成中学校）

指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）

1982 (昭和 57) 年度 「外来語と英語教育 (6)」

— 選定語いについて —

研究授業者 : 小西 照明 (足立区立伊興中学校)

指導講師 : 堀口 俊一 (東京学芸大学)

1983 (昭和 58) 年度 「語いと英語教育 (7)」

— 選定語い (2) ・ 発表語い (1) ・ 外来語と英語教育 (7) —

研究授業者 : 長 勝彦 (江東区立第三亀戸中学校)

指導講師 : 若林 俊輔 (東京外国語大学)

1984 (昭和 59) 年度 「語いと英語教育 (8)」

— 発表語い (2) ・ 外来語と英語教育 (8) —

研究授業者 : 蔦原 秀子 (新宿区立西戸山中学校)

指導講師 : 森住 衛 (大妻女子大学)

1985 (昭和 60) 年度 「語いと英語教育 (9)」

— 「英語基本語い 1000 語」と

「補足 460 語 ・ 外来語 (英語) 400 語」 Interim Report

「外来語と英語教育 (9)」 言葉遊びをとり入れての指導実践例 —

研究授業者 : 長 勝彦 (墨田区立両国中学校)

指導講師 : 若林 俊輔 (東京外国語大学)

1986 (昭和 61) 年度 「語いと英語教育 (10)」

A. 英語 ・ 基本語い 1000 語 ・ Appendices

B. 授業の中でどのように語いをふやすか

C. CLT (Communicative Language Teaching) について

研究授業者 : 日臺 滋之 ・ Ms. Yvonne Broekman (Australia)

(新宿区立牛込第三中学校)

指導講師 : 隈部 直光 (大妻女子大学)

1987 (昭和 62) 年度 「語いと英語教育 (11)」

- A. 基本語いの定着化—授業の中でどのように語いをふやすか(Part2)
(Bingo Game, Guess Work, Pair Work & Skit を行って)
- B. CLT (Communicative Language Teaching) と CF (Communicative Function) について
—東京都公立中学校で使用されている 4 種類の教科書に現れる
Functions (言語機能) / Forms (言語形式) の学年別 Function List—
- C. Assistant English Teacher に関するアンケート調査のまとめ
—AET 導入の年数・採用方法・派遣状況・派遣時数・その他—
研究授業者 : 青木 弘子・Mr. Phillip Roberts (Australia)
(新宿区立牛込第三中学校)
指 導 講 師 : 塩澤 利雄 (宇都宮大学)

1988 (昭和 63) 年度 「語いと英語教育 (12)」

- A. NHK ラジオ続基礎英語 (1986. 4~1987. 3) の dialogs に現れる
伝達機能とその言語形式
- B. 日常の授業で活用できる伝達機能とその言語形式
研究授業者 : 福井 康・Ms. Robarta Schudrick (U.S.A.)
(千代田区立九段中学校)
指 導 講 師 : 萩野 浩 (聖徳短期大学)

1989 (平成元) 年度 「語いと英語教育 (13)」

- CLT (Communicative Language Teaching) と CF (Communicative Functions)
について
東京都公立中学校で使用されている 4 種類の教科書に現れる
Functions (言語機能) / 例文の List
研究授業者 : 鶴田 峰子・太郎良 博 (大田区立南六郷中学校)
指 導 講 師 : 斎藤 誠毅 (神奈川大学)

1990 (平成 2) 年度 「語いと英語教育 (14)」

- A. 日常の授業で活用できる言語機能とその言語形式 (続)
—実情報にかかわる機能—
- B. 東京都公立中学校における英語教育実態調査報告
研究授業者 : 山本 展子・Mr. Frank Berberich (U.K.)
(江東区立深川第七中学校)
指 導 講 師 : 島岡 丘 (筑波大学)

- 1991 (平成 3) 年度 「語いと英語教育 (15)」
日常の授業で活用できる言語機能とその言語形式 (続々)
—意志・感情にかかわる機能の言語形式の Register について—
研究授業者 : 二宮 正男 (狛江市立狛江第一中学校)
指 導 講 師 : 青木 昭六 (愛知学院大学)
- 1992 (平成 4) 年度 「語いと英語教育 (16)」
A. Teacher Talk (1)
B. 日常の授業で活用できる言語機能とその言語形式
—意志・感情にかかわる機能の言語形式の Register に対する
Native Speaker の Comments—
研究授業者 : 北原 延晃 (杉並区立和田中学校)
指 導 講 師 : 上田 明子 (津田塾女子大学)
- 1993 (平成 5) 年度 第 17 回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会東京大会
Teacher Talk (1)
研究授業者 : 杉本 薫 (墨田区立両国中学校)
指 導 講 師 : 若林 俊輔 (東京外国語大学)
- 1993 (平成 5) 年度 「語いと英語教育 (17)」
Teacher Talk (2)
研究授業者 : 重松 靖 (府中市立府中第七中学校)
指 導 講 師 : 金谷 憲 (東京学芸大学)
- 1994 (平成 6) 年度 「語いと英語教育 (18)」
Teacher Talk (3)
研究授業者 : 三浦 邦彦 (足立区立第三中学校)
指 導 講 師 : 森永 誠 (聖徳大学短期大学部)
- 1995 (平成 7) 年度 「語いと英語教育 (19)」
Teacher Talk (4)
研究授業者 : 石井 亨・Mr. John Walding(U.K.) (江東区立南砂中学校)
指 導 講 師 : 佐野 正之 (横浜国立大学)
- 1996 (平成 8) 年度 「語いと英語教育 (20)」
研究部の歩みと「語いと英語教育」第 1 集～19 集のダイジェスト
版
研究授業者 : 長 勝彦 (墨田区立両国中学校)

- 1997(平成9)年度 「語いと英語教育 (21)」
Teacher Talk (5)
Student Talk (1)
研究授業者 : 太田 洋 (東京学芸大学附属世田谷中学校)
指 導 講 師 : 投野 由紀夫 (東京学芸大学)
- 1998(平成10)年度 「語いと英語教育 (22)」
Student Talk (2)
研究授業者 : 原田 博子 (江東区立深川第五中学校)
指 導 講 師 : 和田 稔 (明海大学)
- 1999(平成11)年度 「語いと英語教育 (23)」
Student Talk (3)
研究授業者 : 小柳 守生 (葛飾区立亀有中学校)
指 導 講 師 : 松本 青也 (愛知淑徳大学)
- 2000(平成12)年度 「語いと英語教育 (24)」
Student Talk (4)
研究授業者 : 阿久津 仁史 (文京区立第八中学校)
指 導 講 師 : 緑川 日出子 (昭和女子大学)
- 2001(平成13)年度 「語いと英語教育 (25)」
語い指導 (1)
研究授業者 : 門松 裕之・佐藤 恵美 (墨田区立文花中学校)
指 導 講 師 : 山内 豊 (東京国際大学)
- 2002(平成14)年度 「語いと英語教育 (26)」
語い指導 (2)
研究授業者 : 伊地知 義信 (豊島区立西巣鴨中学校)
指 導 講 師 : 望月 正道 (麗澤大学)
- 2003(平成15)年度 「語いと英語教育 (27)」
語い指導 (3)
研究授業者 : 明石 達彦 (港区立御成門中学校)
指 導 講 師 : 木村 松雄 (青山学院大学)
- 2004(平成16)年度 「語いと英語教育 (28)」
語い指導 (4)
研究授業者 : 関口 智 (葛飾区立常盤中学校)
指 導 講 師 : 相澤 一美 (東京電気大学)

- 2005 (平成 17) 年度 「語いと英語教育 (29)」
 語い指導 (5)
 研究授業者 : 溪内 明 (大田区立東調布中学校)
 指 導 講 師 : 卯城 祐司 (筑波大学)
- 2006 (平成 18) 年度 「語いと英語教育 (30)」
 語い指導 (6)
 研究授業者 : 田口 徹 (府中市立府中第二中学校)
 指 導 講 師 : 長 勝彦 (武蔵野大学)
- 2007 (平成 19) 年度 「語いと英語教育 (31)」
 語い指導 (7)
 研究授業者 : 岸 由季 (町田市立山崎中学校)
 指 導 講 師 : 猪俣 俊哉 (北海道室蘭市立陣屋小学校)
- 2008 (平成 20) 年度 「語いと英語教育 (32)」
 語い指導 (8)
 研究授業者 : 谷口 弘美 (東村山市立東村山第二中学校)
 パネラー : 田口 徹 (府中市立府中第二中学校)
 本多 敏幸 (千代田区立九段中等教育学校)
 モデレーター : 相沢 秀和 (昭島市立瑞雲中学校)
- 2009 (平成 21) 年度 「語いと英語教育 (33)」
 語い指導 (9)
 研究授業者 : 岡崎 伸一 (品川区立小中一貫校日野学園)
 指 導 講 師 : 西垣 知佳子 (千葉大学)
- 2010 (平成 22) 年度 「語いと英語教育 (34)」
 辞書指導 (1)
 研究授業者 : 小川 登子 (葛飾区葛美中学校)
 指 導 講 師 : 小菅 敦子 (東京学芸大学附属世田谷中学校)
- 2011 (平成 23) 年度 「語いと英語教育 (35)」
 辞書指導 (2)
 研究授業者 : 上尾 栄美子 (江戸川区立篠崎第二中学校)
 指 導 講 師 : 日基 滋之 (玉川大学)

- 2012 (平成 24) 年度 「語いと英語教育 (36)」
辞書指導 (3)
研究授業者 : 金子 健次郎 (大田区立田園調布中学校)
指 導 講 師 : 田尻 悟郎 (関西大学)
- 2013 (平成 25) 年度 「語いと英語教育 (37)」
辞書指導 (4)
研究授業者 : 本多 敏幸 (千代田区立九段中等教育学校)
パネラー : 重松 靖 (国分寺市立第三中学校長)
本多 敏幸 (千代田区立九段中等教育学校)
杉本 薫 (東京都立両国高校附属中学校)
田口 徹 (千代田区立九段中等教育学校)
北原 延晃 (港区立赤坂中学校)
モデレーター : 石井 亨 (千代田区立九段中等教育学校)
- 2014 (平成 26) 年度 「語いと英語教育 (38)」
語いサイズを広げる指導の工夫 (1)
研究授業者 : 北原 延晃 (港区立赤坂中学校)
指 導 講 師 : 中嶋 洋一 (関西外国語大学)
- 2015 (平成 27) 年度 「語いと英語教育 (39)」
語いサイズを広げる指導の工夫 (2)
研究授業者 : 久保野 りえ (筑波大学附属中学校)
指 導 講 師 : 新里 眞男 (関西外国語大学)
- 2016 (平成 28) 年度 「語いと英語教育 (40)」
語いサイズを広げる指導の工夫 (3)
研究授業者 : 太田 裕也 (八王子市立第六中学校)
指 導 講 師 : 久保野 雅史 (神奈川大学)
- 2017 (平成 29) 年度 「語いと英語教育 (41)」
語いサイズを広げる指導の工夫 (4)
研究授業者 : 関口 智 (江戸川区立清新第一中学校)
指 導 講 師 : 阿野 幸一 (文教大学)
- 2018 (平成 30) 年度 「語いと英語教育 (42)」
研究部基本語い 1200 と語い指導再考 (1)
研究授業者 : 前川 卓哉 (渋谷区立松濤中学校)
指 導 講 師 : 内田 浩樹 (国際教養大学大学院)

2019 (令和元) 年度 「語いと英語教育 (43)」

研究部基本語い 1200 と語い指導再考 (2)

研究授業者：水嶋 諒 (江東区立第四砂町中学校)

指導講師：日基 滋之 (玉川大学)

2020 (令和2) 年度 新型コロナウイルス感染拡大により、研究冊子の発行および研究発表会・研究授業は中止。

2021 (令和3) 年度 「語いと英語教育 (44)」

研究部中学校推奨語い 1800

研究部小学校推奨語い 700

研究発表者：前田 宏美 (港区立港南中学校)

高杉 達也 (東京都立小石川中等教育学校)

岡 大佑 (足立区立江南中学校)

能美 真弓 (荒川区立第三中学校)

指導講師：日基 滋之 (玉川大学)

*新型コロナウイルス感染拡大のため、研究発表会をオンラインで実施。研究授業は中止。

2022 (令和4) 年度 「語いと英語教育 (45)」

中学校・小学校検定教科書における語彙

中学校検定教科書における太字の単語

中学生が書く活動で使用した語彙 (中間報告)

「研究部中学校推奨語い 1800」「研究部小学校推奨語い 700」

に基づく実践例

研究発表者：前田 宏美 (港区立港南中学校)

高杉 達也 (筑波大学附属中学校)

多田 翔 (江東区立第三砂町中学校)

松野 麻里恵 (港区立三田中学校)

指導講師：日基 滋之 (拓殖大学)

*新型コロナウイルス感染拡大のため、研究発表会をオンラインで実施。研究授業は中止。

2023 (令和5) 年度 「語いと英語教育 (46)」

「研究部推奨語い 1800」に基づく語彙指導実践例

生徒が英語で書きたいけれども書けなかった日本語

研究発表者：高杉 達也 (筑波大学附属中学校)

岡 大佑 (東京都立小石川中等教育学校)

研究授業者：橋本 晋作 (渋谷区立松濤中学校)

指導講師：三浦 幸子 (都留文科大学)

2024 (令和6) 年度 「語いと英語教育 (47)」

生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト

ICT を使った指導実践例

研究発表者：小澤 美沙姫 (杉並区立泉南中学校)

五井 沙織 (板橋区立高島第一中学校)

研究授業者：宮崎 太樹 (日野市立日野第一中学校)

指導講師：本多 敏幸 (都留文科大学ほか)

2025 (令和7) 年度 「語いと英語教育 (48)」

「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」の活用法に関する研究

研究部員の授業力向上を目指した授業研究

研究発表者：小林 竜也 (千代田区立九段中等教育学校)

五井 沙織 (板橋区立高島第一中学校)

研究授業者：多田 翔 (江東区立第三砂町中学校)

指導講師：和田 玲 (ウィーン大学英米研究科教育言語学

研究員、長崎大学教育学部助教)

巻末資料 2

今年度の活動記録

第1回部会 4月17日（対面会議）

1. 部内役割分担の確認
2. 本年度の研究計画・内容について
3. 研究部ワークショップの日程・内容の確認

第2回部会 5月29日（対面会議）

1. 研究推進（授業検討・協議）提案者 熊田 昌子
（今後の研究、公開授業について）
2. 研究部ワークショップ（実施案）

第3回部会 6月10日（対面会議）

1. 研究推進（授業検討・協議）提案者 瀧本 廣樹
（発信語彙リスト活用実践例）提案者 森沢 俊彦
2. 研究部ワークショップ（実施方法の確認、発表者の決定、案内文書等）

第4回部会 7月10日（対面会議）

1. 研究推進（授業検討・協議）提案者 小林 竜也
（発信語彙リスト活用実践例）提案者 小澤 美沙姫、瀧本 廣樹
2. 研究部ワークショップ（発表内容、運営方法の確認、参加者応募状況等）

第22回研究部ワークショップ

7月29日（対面による開催）

1. 「中間指導について」発表者 小林 竜也
2. 「気軽に試そう、Try Out 活動！」
～教科書を活用して、生徒が言いたいことを Try Out させてみましょう～
発表者 小澤 美沙姫
3. 「Inductive Teaching の実践と明示的指導後の取り組み」
発表者 長谷川 眞司

8月5日（対面による開催）

1. 「Picture Card 活用の実践例」発表者 瀧本 廣樹
2. 「即興で話す力を高める授業実践」
～トピック型・タスク型テーマを設定した活動を通して～
発表者 松野 麻里恵、前田 宏美
3. 特別講演
「学習者エンゲージメントを促す英語授業の着眼点、即興で話す力を高める授業実践」
講師 和田 玲（ウィーン大学英米研究科教育言語学専攻研究員、長崎大学教育学部助教）

第5回部会 9月18日（対面会議）

1. 研究部ワークショップ振り返り、反省
2. 研究推進（授業検討・協議）提案者 森沢 俊彦
（発信語彙リスト活用実践例）提案者 藤野 康明
3. 公開授業・研究発表会（日程、実施方法の確認、授業者・講師・助言者の決定等）

第6回部会 10月30日（対面会議）

1. 研究推進（授業検討・協議）提案者 多田 翔
（発信語彙リスト活用実践例）提案者 熊田 昌子
（研究計画、研究紀要の担当分担、今後の研究について等）
2. 公開授業・研究発表会（運営本部、担当分担の確認）

第7回部会 11月20日（対面会議）

1. 研究推進（発信語彙リスト活用実践例）提案者 福島 恵子
（部員同士による意見交換、研究紀要、今後の研究について）
2. 公開授業・研究発表会（実施要項、指導案検討等）

第8回部会 12月18日（対面会議）

1. 研究推進（研究冊子原稿の検討）
2. 公開授業・研究発表会（指導案の検討、運営、案内文書等）

第9回部会 1月22日（対面会議）

1. 研究冊子原稿の校正
2. 研究発表会発表リハーサル
3. 公開授業・研究発表会（発表内容、運営方法の確認等）

研究部研究授業・研究発表会 2月20日（対面による開催）

1. 研究授業 授業者 多田 翔（江東区立第三砂町中学校）
2. 研究協議
研究部 令和7年度研究発表 発表者 小林 竜也、五井 沙織
「生徒の表現の幅を広げる発信語彙リスト」の活用法に関する研究
研究部員の授業力向上を目指した授業研究
指導助言・講演
講師 和田 玲（ウィーン大学英米研究科教育言語学研究室、長崎大学教育学部助教）

第10回部会 3月13日（対面会議）

1. 研究発表会の反省
2. 今年度の活動の反省
3. 来年度の研究内容、活動計画の検討

東京都中学校英語教育研究会研究部

橋本 晋作	(渋谷区立松濤中学校)	高杉 達也	(筑波大学附属中学校)
森沢 俊彦	(日野市立日野第三中学校)	多田 翔	(江東区立第三砂町中学校)
松野 麻里恵	(港区立三田中学校)	大島 良一	(千代田区立麴町中学校)
福島 恵子	(清瀬市立清瀬第三中学校)	一ノ瀬 麻子	(港区立港南中学校)
岡 大佑	(東京都立小石川中等教育学校)	長谷川 眞司	(小平市立小平第三中学校)
五井 沙織	(板橋区立高島第一中学校)	小澤 美沙姫	(杉並区立泉南中学校)
瀧本 廣樹	(東京都立大田桜台高等学校)	小林 竜也	(千代田区立九段中等教育学校)
熊田 昌子	(大田区立蒲田中学校)	藤野 康明	(調布市立第四中学校)
今井 美菜子	(足立区立第十四中学校)	泉原 花奈子	(多摩市立和田中学校)
柴田 結佳	(日野市立平山中学校)	村山 祐亮	(日野市立三沢中学校)
前田 宏美	アドバイザー (文京学院大学)		